

宮城県文化財調査報告書第 115 集

# 亘理町畠中貝

—黒森沢砂防流路工事関連調査報告書—

昭和 61 年 3 月

宮城県教育委員会

## 序

宮城県は私達の祖先が大切に残してくれた豊かな自然環境と多数の文化財に恵まれてあります。しかし、豊かな自然環境も文化財も近年の開発の波にもまれ、保護の手を差し延べなければ、消滅してしまう状況にあります。人々の生活や心持ちに潤いを与えてくれる自然や文化財を将来に伝えていくことは現代の私達の重要な責任です。

亘理郡は西に阿武隈山地を背負い、東は太平洋に面した温暖な気候に恵まれた地域です。縄文時代の遺跡は多数分布しておりますが、同時代の貝 は亘理町の椿貝・畠中貝、山元町の中島貝 の三ヶ所しかありません。いずれも太平洋に面した貝 としては珍しくヤマトシジミを主とする半鹹半淡のものです。

今回報告する畠中貝 は工事で破壊される部分が少なく、事前の発掘調査もごく僅かな面積で済みましたが、縄文時代後期と晩期に属する土器や食料の食べ滓である獸骨・魚骨などが多数採集できました。亘理郡の縄文人の食生活が明らかにされたのは初めてのことと思います。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護のために協議や調整にご理解をいただき、発掘調査にも多大なご協力を寄せられました関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

昭和61年3月

宮城県教育委員会

教育長 郷 古 康 郎

## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 発見された遺構と遺物	3
A 基本層位と発見遺構	3
① 基本層位	3
② 遺構	5
B 堆積層出土遺物	8
① 人工遺物	8
(1) 土器	8
(2) 土製品・石製品	17
(3) 骨角・貝製品	18
(4) 石器	20
② 自然遺物	23
IV 考察	24
A 出出土器について	24
B 食料の獲得	25
① 現在の地形	
② 古地形の復元	
③ 生活の場	
引用・参考文献	28

## 例　　言

1. 本書は宮城県土木部(担当、宮城県仙台土木事務所)が計画した黒森沢砂防路工事に伴う畠中貝の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮城県土木部(担当、宮城県仙台土木事務所)から依頼されて、宮城県教育委員会が主体者となり、文化財保護課が担当した。
3. 工事に係る埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては宮城県仙台土木事務所や亘理町教育委員会から多大のご協力があった。また、発掘調査の時は高橋ますみ氏宅には色々とお世話をいただいた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(1973年)を利用した。
5. 本書の第1図は建設省国土地理院発行の1/50,000地形図「岩沼」「角田」を複製して利用した。
6. 本書は調査員全員で協議しながら執筆し編集した。
7. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

## 調　　査　要　項

1. 遺跡名　　: 畠中貝 (遺跡記号 II: 宮城県遺跡地名表番号 13026)
2. 調査期間　: 発掘調査　　—昭和60年8月15日～30日  
整理・報告書作成等—昭和60年9月～昭和61年3月
3. 調査対象面積: 約40m<sup>2</sup>
4. 発掘調査面積: 約40m<sup>2</sup>
5. 発掘調査主体者: 宮城県教育委員会
6. 発掘調査担当者: 宮城県教育庁文化財保護課

　　調査員: 藤沼邦彦・加藤道男・真山悟・阿部博志・佐藤則之・笠原信男

　　庶務: 岩佐昭矩・曾根 章・鈴木千枝子

## I 調査に至る経過

昭和58年8月、宮城県仙台土木事務所から宮城県教育委員会に対し、亘理郡亘理町吉田地内に於ける黒森沢砂防流路工事に関連する埋蔵文化財について協議があった。このため県教育委員会(担当 文化財保護課)は、昭和59年1月に亘理町教育委員会 亘理町建設課・宮城県仙台土木事務所の職員とともに、計画地域内の分布調査を行ったところ、作田遺跡 作田北遺跡 畑中貝 向山遺跡 の4遺跡が工事区と係わりをもつこと明らかになった。

遺跡名	工事に係る面積	地目	表採遺物	遺跡の種別
作田遺跡	90m <sup>2</sup>	杉林	土師器	平安時代の集落跡
作田北遺跡	210m <sup>2</sup>	荒地	土師器・須恵器	平安時代の集落跡
畠中貝	60m <sup>2</sup>	畠・竹林	土器・貝殻	縄文時代後・晚期の貝
向田遺跡	600m <sup>2</sup>	畠・杉林	土師器	平安時代の集落跡

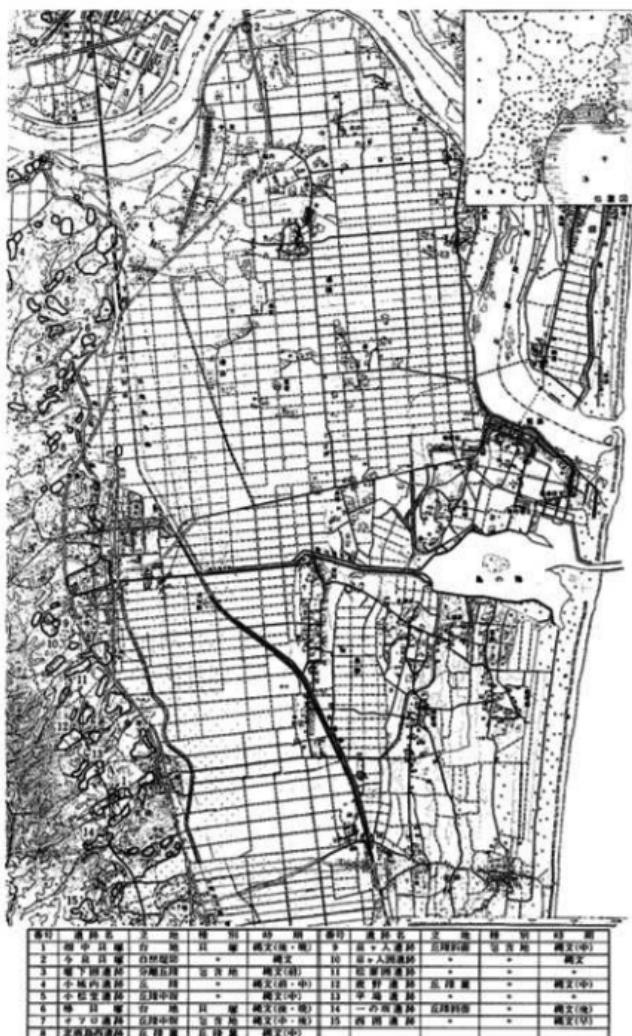
このうち畠中貝 を除く3遺跡は遺物の分布もほとんどなく遺跡のはずれに相当すると考えられたため、工事の際に立会調査を行い、表土をはがした段階で遺構・遺物の有無を確認し、万一遺構等があった場合は緊急に調査して対応することにした。

畠中貝 は、貝層部分が工事地区内に含まれているため、保存のための協議を引き続いたが、流路に沿った工事であるため工事区域の変更が困難であることなどにより、事前の発掘調査を行うことに決定した。しかし、亘理町教育委員会にはまだ埋蔵文化財担当の専門職員がないため、宮城県教育委員会が発掘調査の主体者となり文化財保護課が調査することになった。

なお、作田北遺跡と向山遺跡についてはそれぞれ昭和59年1月と10月に立会調査を行ったが遺構・遺物等はみられなかった。作田遺跡の立会調査は昭和61年度の予定である。

## II 遺跡の立地と環境

畠中貝 は宮城県亘理郡亘理町吉田字畠中にある。亘理町の中心部から南に3kmの地点に位置する。周囲は平坦な地形であるが、貝 の位置する地域は扇状台地の微高地という。標高約26mで東部の水田と比高は約19mである。貝 の北縁に沿って亘理地壘山地から東にむかってながれる黒森沢とよぶ幅1~2mほどの小川がある。遺跡としての面積は約1,200m<sup>2</sup>である。貝層の分布は二ヶ所あり、東西に分かれ(第2図)。貝層はヤマトシジミの貝殻を中心とする汽水性の貝 である。昭和46年に町史編纂のために、志間泰治氏によって東側の貝層の北よりの部分が発掘調査されたことがある(志間:1975)が、その地点は今回の発掘調査した地区と一部重複していた。



第1図 周辺の通跡

周辺の遺跡を見てみよう（第1図）。亘理郡は南北に細長く、西に阿武隈山地の支脈があり東に沖積地が広がり太平洋に面する。山地の東縁は沢によって開析されて鋸歯状になり小さな丘陵が多数突き出ている。遺跡の分布はこの丘陵に沿った部分が多い。時期のわかる縄文時代の遺跡は亘理町に14個所（志間：1975）。

山元町に9個所（宮城県教委：1981）ある。時期別の遺跡数を調べると中期と後期のものが多く、早期と晚期が少ない。しかし、発掘調査されたものや内容が公表されているのが少ないので今後の調査で変わることもあり得ると思わ

れる。このうち貝を伴うものは亘理町の椿貝（後・晚期）、畠中貝（後・晚期）、山元町の中島貝（後・晚期）の3遺跡である。いずれもヤマトシジミを中心とする汽水性貝で後期から晚期にかけて貝層が形成されている。中島貝では中期の土器も出土するが貝層下の黒土層からである。山元町の影倉遺跡では晚期の土器に伴って小さな貝殻のブロックが発見されている（志間泰治氏教示）。

	早期	前期	中期	後期	晚期
亘理町	1	2	9	5	2
山元町	3	5	2	5	2
合計	4	5	11	10	4

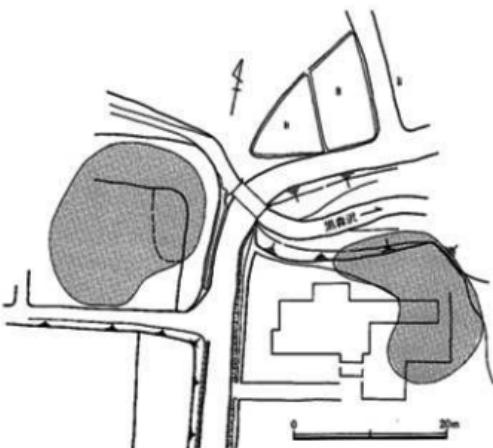
### III 発見された遺構と遺物

調査対象区は高橋ますみ氏宅の裏側にある畠地の部分である。畠中貝全体のなかでは北端部にあたり、背後の山地から流れ出る小川の縁辺に位置する。工事にかかる部分はせまく、調査区の面積は約40m<sup>2</sup>である。調査区の一部は志間泰治氏が発掘調査した時のトレーナーと重複し、また小川の縁にあたる部分は崖となり、多少崩れた部分もあると思われる。畠の表面には貝殻の散布がみられた。調査の方法は地形に合わせて調査区全体に1辺3mのグリッドを設定し、グリッド単位で発掘をおこなった。グリッドの名称は遺構配置図（第3図）を参考にして欲しい。なお、貝層の堆積層は攪乱部分を除いてすべて持ち帰り、最小1mmの篩にかけて微細な魚骨などの自然遺物の採集につとめたが、石鏟や小さな骨角製品なども現場で発掘中に気づいたものより、篩をかけて見つけたもののほうが多い。

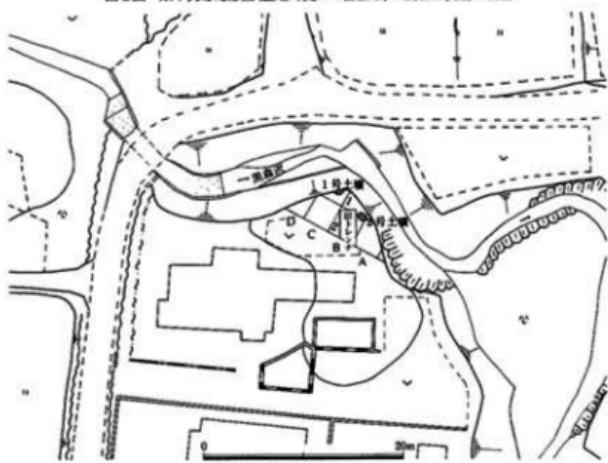
#### A 基本層位と発見遺構

調査の結果、貝層と2基の土壙が検出された（第3図）。貝層は表土下約15cmにあり、20~30cmの厚さで調査区のほぼ全域に分布している。貝層は3枚に分層されるが、どの層でも含まれる貝殻は汽水性のヤマトシジミが中心で90%以上を占めると思われる。

##### ①基本層位（第4図）



第2図 煙中貝塚地形図(直理町史に一部加筆)※網目は貝層の範囲



第3図 煙中貝塚遺構配置図

第1層：畑の耕作土で、約15cmの厚さがある。

第2層：暗褐色シルトと貝殻からなる混土貝層で、約10cmの厚さがある。鹹水産のものが若干混入する。縄文時代晩期の大洞C2式の土器が出土した。

第3層：暗褐色シルトと貝殻からなる混土貝層で、約10cmの厚さがある。第2層とは土の色調がやや明るい点と鹹水産貝類が若干多くなる点で異なる。大洞C2式の土器が出土した。

第4層：暗褐色シルトと貝殻からなる混土貝層で、約10cmの厚さがある。含まれる貝の量は第2・3層よりも多く、部分によっては純貝層にちかい状況であった。鹹水産貝類が若干混入し、その割合は第2・3層よりも多いようである。後期末の土器が出土した。

第5層：暗褐色シルトからなる土層で、約20cmの厚さがある。上部に近いほど貝殻や遺物などを少ないながらも含んでいた。後期中・後葉の土器が出土した。

第6層：黄褐色のシルト質の土層で、遺物を含まない。いわゆる地山である。

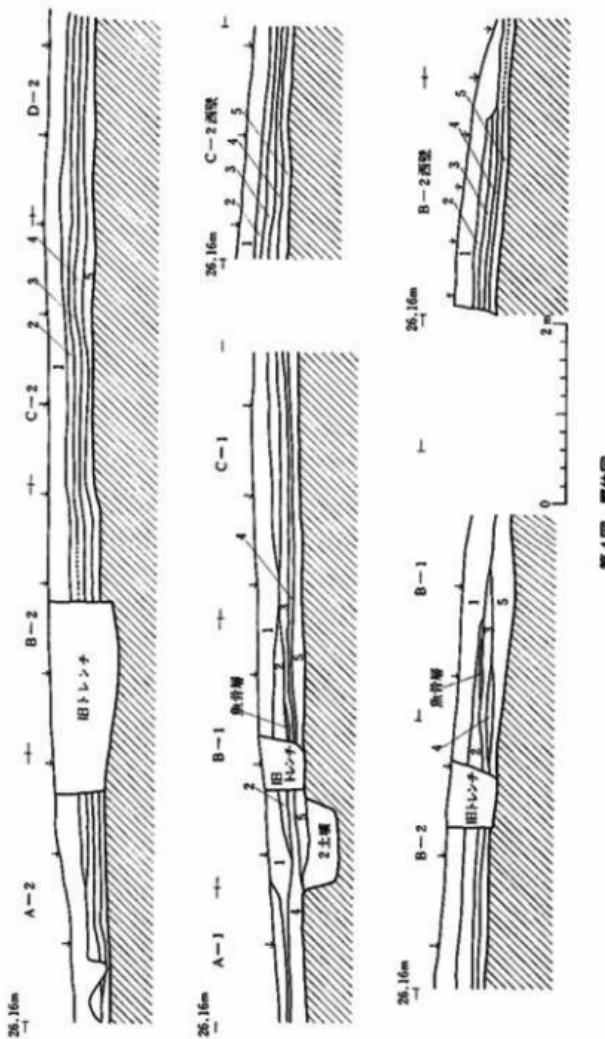
なお、第1～4層および第5層上部からは縄文土器・石器・骨角製品・貝殻・各種動物の骨などが出土している。特に、B-1区の第3層上面やC-2区の第5層上面から厚さ3cmほどの魚骨のブロック層が小規模な範囲で確認された。

#### ②遺構

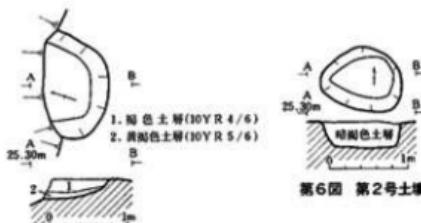
第1号土壙（第5図）：C-1区の第5層上面で確認された。土壙の北半分は小川の崖によって削られていた。平面形は残存部分からすると不整な方形を呈するものとみられる。規模は残存長で東西140cm 南北80cm 深さは20cmである。底面は皿状に窪み、壁はゆるやかに立ち上がっている。内部の堆積土第1層から後述する第4層出土土器に相当する土器（第7図1～20）、炭化物や骨片（シカ・イノシシ・イヌ・カモ類・ヒキガエル）などが出土地している。

第2号土壙（第6図）：B-2区の第5層上面で確認された。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸100cm 短軸80cmで、深さは35cmである。底面はほぼ平坦であり壁の立ち上がりは急である。堆積土は暗褐色土で黄褐色の地山ブロックを含んでおり、人為的に埋められたものとみられる。内部から第5層出土土器に相当する土器（第7図21～28）・土偶（第15図6）・骨片（シカ・ノウサギ・鳥類・フグ）が出土地している。

第1号土壙・第2号土壙とも確認されたのは土壙（第5層）上部である。しかし、堆積土出土の土器には違いがあり、第1号土壙は後期末葉、第2号土壙は後期後葉に属する。その性格は不明である。



第4図 層位図



第5図 第1号土壤



第6図 第2号土壤



第7図 第1号土壤(1~20)・第2号土壤(21~28)出土土器

## B 堆積層出土遺物

### ① 人工遺物

#### (1) 土 器

遺物の出土する層は貝層・土層を含めて5枚（第1～5層）に分けられており、第1層は表土、第2～4層は貝層、第5層は土層である。以下層ごとに記述するが、第2・3層は出土土器の特徴がほぼ同様であることから一括して説明する。また、A区は攢乱等が著しく層位が不明確なため第1層に含めた。

##### 《第5層出土土器》

深鉢・壺・注口・鉢形土器が出土している。量的には深鉢形土器が多い。以下文様をもつものと地文のみのものとに分けて器形ごとに説明する。

###### a 文様をもつもの

###### 〈深鉢形土器〉(第8図2-32)

A類：胴部に括れがある器形である。口縁部と胴部の資料がある。文様の種類によって2つに分かれる。

A1(2-8, 18-20)：幅広い無文部と曲線的な磨消繩文による文様をもつものである。2-4は口縁に沿って刻目が、5-7-20は繩文帯が巡る。口縁部形態は扇形の波状口縁と平縁がある。20は小形土器で、括れ部に無文帯がある。18-19は括れ部に刺突が列をなす。8は胴部資料で、繩文は羽状(R L + L R)である。

A2(10-12, 14-17, 21-22)：弧線連結文・弧線入組帶状文が施されるものである。繩文や刻目が充填されている。10-11は突起が付き、口縁に沿って逆三角形の刺突が巡る。これらの土器には粘土の貼付がみられ、a：粘土をつまんだようなもの(16)、b：ボタン状のもの(10-11)、c：紐状のもの(21-22)、の種類があり、また刺突にはa：一方に粘土を盛り上げたもの(14-15)、b：逆三角形のもの(17)、がある。

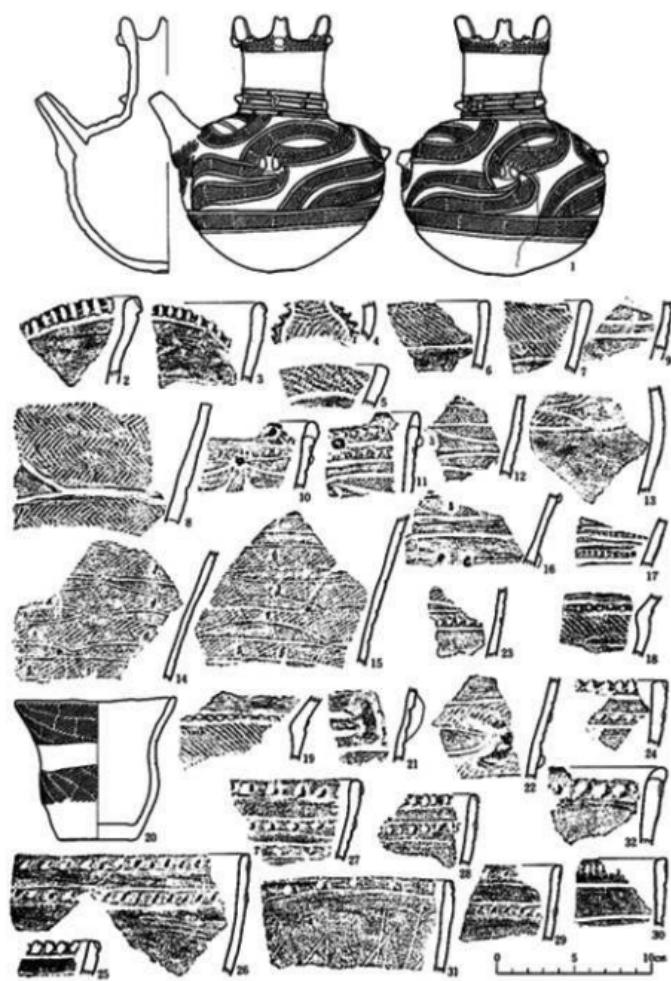
B類：底部から口縁部までゆるやかに外反して立ち上がる器形である。文様の種類によつて2つに分かれる。

B1(9-13-23)：弧線連結文や入組帶状文が施されるものである。繩文が充填され、文様には上記bの刺突が見られる。

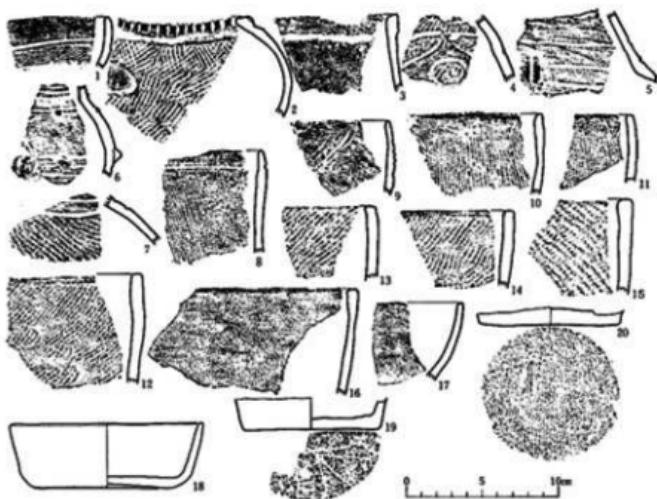
B2(24-32)：口縁に沿って刺突が巡るものである。31-32は1条で、31の胴部には斜格子状の沈線がみられる。24-30は2条以上巡っている。刺突は上記a・bの両者がある。

###### 〈壺・注口土器〉(第8図1-第9図2-7)

A類(第8図1)：口頸部が長くわずかに外反し、胴部がほぼ球形の注口土器である。口縁部に大小の突起が交互に4個配される。頸部には沈線が4条巡り、高低2種の瘤が貼付されてい



第8図 第5層出土土器(1)



第9図 第5層出土土器(2)

る。大小の突起と入り組み部の瘤は2分されるよう沈線が入っている。胴部には向かい合う弧線が入り組んだ文様が施され、縄文が充填されている。縦のひび割れはアスファルトで補修されている。

B類(第9図2~7)：破片のため全体形は不明である。文様はA類と違いB1類：深鉢A1に類似するもの(2~4)とB2類：沈線間に縦長の貼付文がみられるもの(5~6)がある。ほかに肥厚した無文の口縁部(3)と、数条の沈線が巡る頸部(7)が出土している。

#### 〈鉢形土器〉(第9図1)

深鉢A1類に似た文様が施されている。

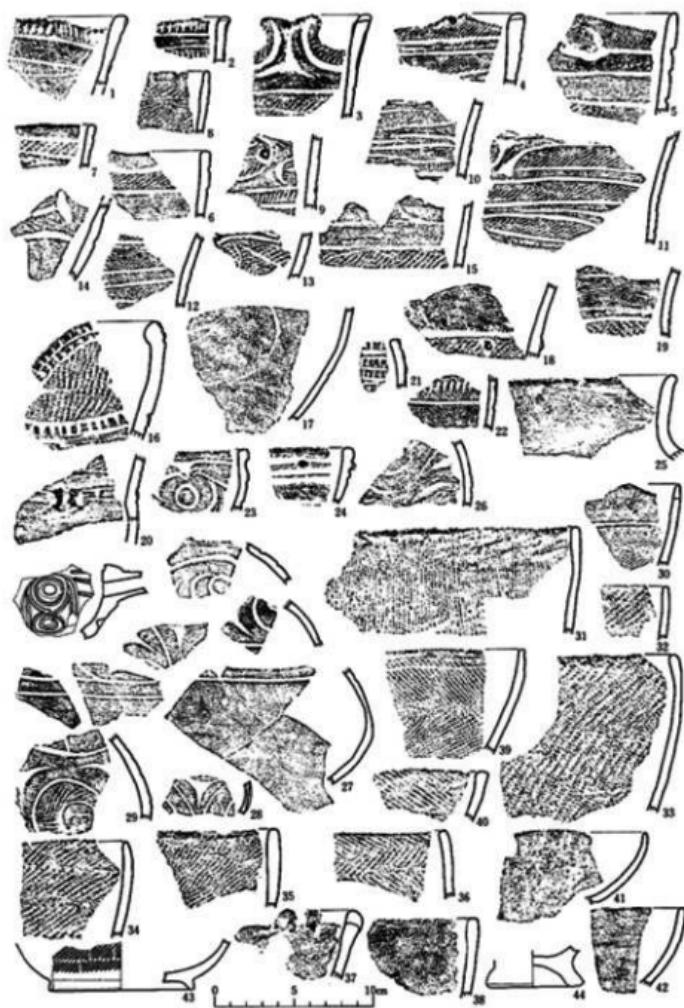
地文のみのもの。

#### 〈深鉢形土器〉(第9図8~16)

8は口縁部に沈線が1条めぐる。地文の種類は櫛歯状沈線(8~11)、L R斜縄文(12~14)、R L斜縄文(15)、無文(16)がある。また9には沈線文の前に布目状の圧痕がついている。

#### 〈鉢形土器〉(第9図17~18)

ともに無文である。



第10图 第4层出土土器

## 《第4層出土土器》

深鉢・壺・注口・鉢形土器が出土している。

### a 文様をもつもの

#### 〈深鉢形土器〉(第10図1~20)

A類(1~13)：胴部に括れのある器形である。

波状口縁と平縁があり、前者には波頂部に三叉文のみられるもの(3~5)があり、後者には口縁に沿って刻目(1~2)、縄文帯(6~8)の巡るものがある。胴部には弧線入組帶文(9~11~13)や弧線連結文(1)が配される。11の入組部は三叉文状になっている。弧線文には縄文や刻目が充填されている。瘤が付く。

なお、同様な器形に16~20があるが、これらは特徴が前述した第5層出土土器と共通しており、混入したものと思われる。

B類(14~15)：底部から口縁部までゆるやかに立ち上がる器形である。

14は沈線により三叉文が描かれている。15は口縁に沿った浅い沈線の一部が三叉文に近い文様となる。

#### 〈壺・注口土器〉(第10図25~29)

27~28は注口土器であり、胴部に三叉文が施されている。26~29の沈線も三叉文の一部であろう。25は口縁部片である。

#### 〈鉢形土器〉(第10図21~24)

1類(21~22~24)：沈線間に刻目や瘤が付くものである。

2類(23)：三叉文と魚眼状三叉文が施されるものである。

### b 地文のみのもの

#### 〈深鉢形土器〉(第10図30~38)

上記B類同様、変化のない器形である。小波状口縁(30)、平縁(31~38)があり、後者には突起の付くもの(37)もある。30は口縁部に1条の沈線が巡る。地文は櫛歯状沈線(31)、LR斜縄文(30~32~35)、羽状縄文(36)、無文(37~38)がある。

#### 〈鉢形土器〉(第10図39~42)

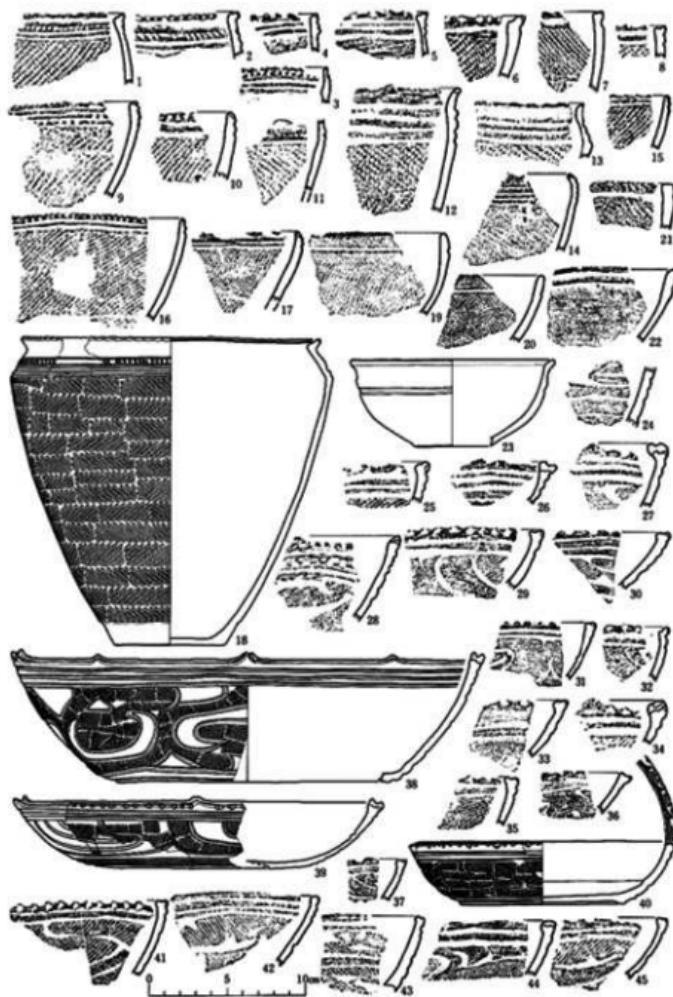
39には浅い1条線がみられ、地文にはRL斜縄文(40)、羽状縄文(39)、無文(41~42)がある。また底部資料には台が付くもの(43~44)がある。大きさからみて鉢形土器の底部であろう。

## 《第2~3層出土土器》

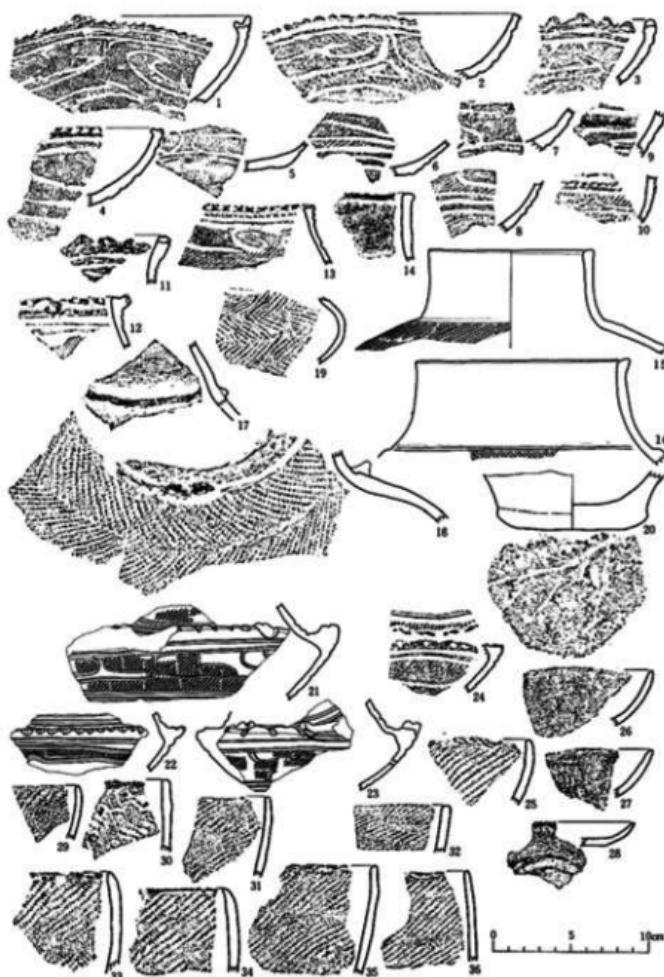
深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器が出土している。

### a 文様をもつもの

#### 〈深鉢・鉢形土器〉(第11図1~18)



第11图 第2·3层出土器(1)



第12圖 第2・3層出土土器(2)

破片資料では両者を区別できないのでまとめて扱う。

A類(1~11)：ほぼ直立する器形である。口縁上部には刺突があり、端部に沈線が巡ることが多い。頸部には沈線(3~8・10)、連続する刻目(1・2・11)、交互の刻目(9)がある。

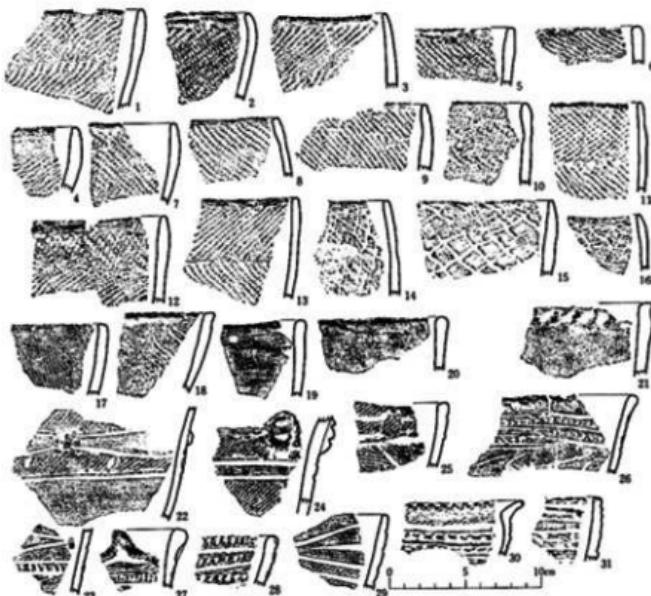
B類(12~13・18)：頸部が「く」字状に屈曲する器形である。口縁上部に刺突がある。頸部には沈線(12・13)・刻目(18)がある。

C類(14~17・24)：やや内彎している器形である。口縁上部に刺突があり、17は「L」字状になる。

24も深鉢とおもわれ、弧線による文様がみられるが、小破片のため不明である。

〈浅鉢形土器〉(第11図19~23)

口縁部が内彎する器形で、頸部に沈線が巡り、地文はL R斜縄文(19~20)、R L斜縄文(21)、



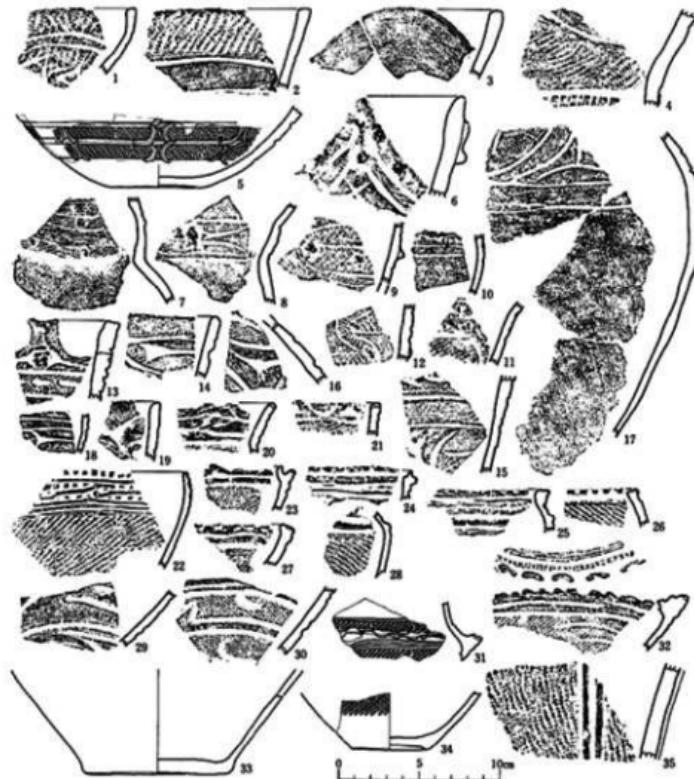
第11図 第2・3層出土土器(3)

無文 (22・23) がある。23は内外面とも黒色を呈する。

〈皿形土器〉(第11図25~45、第12図1~10)

口縁端部に刺突、上端に沈線が施され、頸部が無文、胴部に雲形文がみられる。40の口縁上部の沈線は鉤形に区切られている。第12図3は小波状口縁である。これらには縄文が充填されており、LRが多く、RL(42~44)、RR(第12図2)もある。24の内面は赤彩されている。

〈壺形土器〉(第12図14~19)



第14図 第1層(表土)・A区出土土器

壺は破片で、文様の有無が不明なため、まとめている。14~16は口縁部である。17は頸部に隆線が巡る。18は頸部の沈線上に突起が付く。18~19は羽状縄文、19の内面は赤彩されている。

#### （注口土器）（第12図21~24）

胴部に雲形文が施されている。地文はL R斜縄文である。

11~13は注口土器もしくは壺形土器の口縁部である。口縁端部に刺突、上部に沈線が巡るもの(12~13)と大小の突起が付くもの(11)がある。

#### b 地文のみのもの

浅鉢・皿形土器(第12図25~28): 25の地文は羽状縄文、26~28は無文である。

深鉢形土器(第12図29~36、第13図1~20): 平縁である。地文は綾絹文(29~30)、L R斜縄文(31~36)、L L斜縄文(4)、R L斜縄文(5~10)、羽状縄文(11~13)、網目状燃糸文(14~16)、櫛齒状沈線文(17~18)、無文(19~20)の各種がある。

その他に、木葉痕の付いた底部(第12図20)、前述した第5~4層出土土器と同じ特徴の、混入と考えられる土器(第13図21~31)がある。

#### 《第1層(表土)・A区出土土器》

ほとんどが第5~2層出土土器に類似するものであるが、そのほかに、A:鉢形土器の胴下部破片で横位沈線を「X」字状に区切ったもの(第14図5)、B:鉢形土器で口縁に沿って三叉文が描かれているもの(第14図18~21)、C:鉢形土器の口縁部に羊齒状文がつくもの(第14図22)、D:深鉢形土器の胴部で、L R縱位縄文に隆線を2本並べて縦に貼り付けているもの(第14図35)がある。

第5層出土土器に類似するもの - 第14図1~4、6~9

第4層 " " - 第14図10~17

第2~3層 " " - 第14図23~32

#### (2) 土製品・石製品

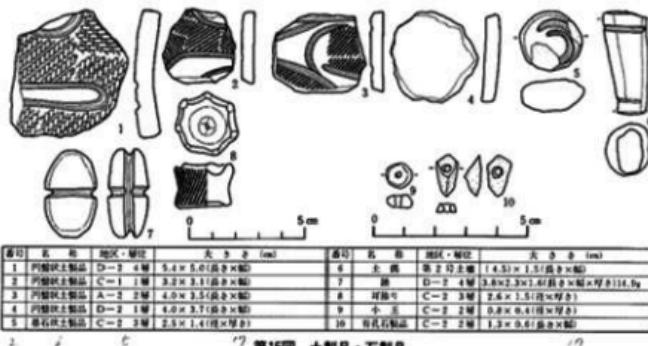
出土した土製品は、円盤状土製品・碁石状土製品・土偶・錘・耳飾り・小玉で、石製品は有孔のものがある。以下個別に説明する(第15図)。

#### (土製品)

円盤状土製品(1~4): 土器片の周囲を打ち欠いて不整の円形に整形したもので、周囲は研磨されていない。

碁石状土製品(5): 磁石をやや厚くした感じの扁平なもので、一面に文様とおもわれる沈線が2条あるが、他面は無文である。用途不明。

土偶(6): 土偶の右脚の膝から下の部分である。膝の部分に2条の沈線が巡るが、内側にあ



第15図 土製品・石製品

たる部分は途切れている。足首はくびれによって表現され、足は裏からみると長楕円形で、指の表現などはない。

錘(7)：扁平な楕円形のもので、横に一条の溝、側面にも縦に一条の溝が巡るので、側面では十字に溝が交差している。魚をとる網の錘とみられるものである。

耳飾り(8)：臼形の耳飾りで、外面の周囲に7個の小さな瘤状突起を花弁のように配している。中央にも突起に似た丸い小さな高まりがある。側面はやや凹凸、細かなLR繩文が施されている。内面はやや窪む。赤彩などはみられない。

小玉(9)：扁平で円形の小さな玉で小孔がある。他のものと連ねて装身具として使用されたものとみられる。赤彩などはみられない。

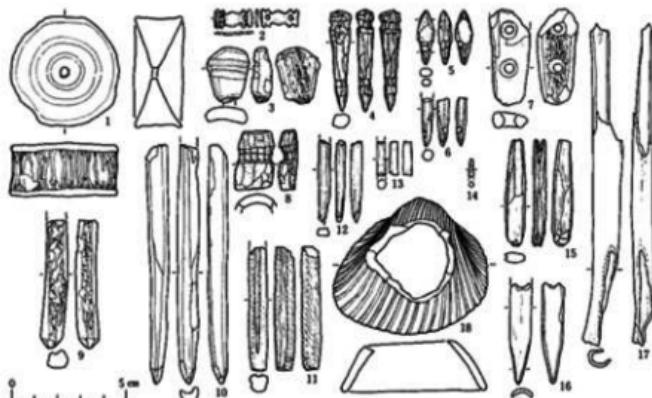
### (石製品)

4面からなる不整の小さな角碟を利用し、孔を開けたもの(10)で、装身具とみられる。面はいずれも自然面で、孔は両面から開けられている。赤彩などもなく装飾性があまり感じられないが、やはり他のものと連ねられて装身具として用いられたものとみられる。

### (3) 骨角・貝製品

骨角製品には装身具、鏃、彎曲刺突具(?)、弓箭形角製品、棒状角製品、刺突具、その他不明品がある。ただし、その他の1点は貝製品(?)である。刺突具が最も多いため、完形品は少なく、全体の形状を知りうるものは少ない。以下、個別的に説明する(第16図)。

装身具(1~4)：1は椎骨の周囲を研磨し、中央に3.1mmの孔を開けている。孔は一部に寄って広がっているので紐擦れかも知れない。耳飾りの可能性があるが、紐擦れとすれば、紐につけてぶら下げたものかもしれない。2は薄い板状に加工した横長のペンダントである。左



番号	名 称	地質・層位	大 き さ (cm)	材 質	番号	名 称	地質・層位	大 き さ (cm)	材 質
1	骨針	A-3 3号	4.1(±0.2)	アセツメの骨質	10	刺突具	C-1 2号	(29.4±0.8)×(4.8±0.2)	シラカバの骨質
2	骨針	B-2 3号	3.9(±1.0)×(4.6±0.2)	イシノリの子貝大殻	11	刺突具	D-2 1号	1.5(±0.2)	シラカバの骨質
3	骨針	C-2 4号	3.5(±1.0)×(4.6±0.2)	シラカバの子貝大殻	12	刺突具	C-2 2号	3.5(±0.2)	(貝殻)
4	骨針	C-1 2号	4.5(±0.5)×(4.6±0.2)	シラカバの中子貝	13	刺突具	C-1 2号	1.5(±0.2)	(貝殻)
5	骨	B-1 1号	2.4	(貝殻)	14	刺突具	C-1 2号	1.5(±0.2)	(貝殻)
6	骨	C-2 4号	2.1	(貝殻)	15	刺突具	C-2 4号	4.6(±0.2)	(貝殻)
7	骨突具	C-2 3号	3.0(±1.0)×(4.6±0.2)	シラカバの骨質	16	刺突具	C-1 2号	4.4(±0.2)	シラカバ or イシノリ
8	骨突具	C-2 2号	2.6	(貝殻)	17	その他1	C-2 7号	18.0(±0.2)	(貝殻)
9	骨突具	C-2 3号	5.5(±0.2)	(貝殻)	18	その他2	C-2 5号	5.0	(貝殻)

第16回 骨角・貝製品

右対称形で両端近くに孔が1個ずつあけられている。一面は象牙質で一端に寄って模様らしい沈線がわずかにみられる。他面はエナメル質で自然面のままである。いまでも美しい光沢をのこしている。3は棒状部分を欠損したかんざしの頭部破片とみられる。表面に二条の溝がある。4は棒状のもので、一端に骨端部の一部を残し、他方は鋭く尖る。端部近くに溝が巡る。尖端部近くも浅くくびれる。刺突具とも思われるが、わずかであるが全体に赤彩された痕跡があるので装身具とみなした。

鎌(5~6):5は完成品で、身部と基部がわずかな段によって区別される。6は基部の破片で段の部分がわずかに残るので鎌と判断した。2個とも基部にアスファルトの痕跡がわずかにある。

彎曲刺突具(?) (7):両端が欠損しているため全体形はわからないが、彎曲刺突具の基部と思われる。鹿角を扁平に加工して穴を2個あけている。

弓箭形角製品(8):縦に割れた4分の1ほどの破片である。内部にアスファルトの付着した痕跡はない。

**棒状角製品(9)**: 鹿角を縦に割ったものを棒状に丸く仕上げたもので、一部に角の表面の凹凸が残る。先端部はやや丸く尖る。

**刺突具(10~16)**: 10は骨を縦に4分割して仕上げ、先端部を尖らせたもの。先端に使用による磨耗がみられる。12はシカの中手骨または中足骨を縦に割り、周囲を研磨し一端を鋭く尖らせたもの。13は骨か鹿角か不明である。棒状に丸く仕上げたもので、表面は丁寧に研磨されている。両端が欠損している。11は骨を縦に4分割し、周囲を磨いて棒状にしたもので、残存する端部は切断した痕跡を残す。先端部から4cmまでの部分が赤褐色に変色しているが、特に2.5cmまでの変色部分が横方向に縞状になっている。この部分に細い紐状のものを巻きつけ何かを塗布した痕跡とみられる。あぐのない単純なヤスの基部である可能性がある。14は針の先のように鋭く尖らせた先端部の破片。焼けているのか灰色に変色している。15は肋骨を切り取り、両側面を中の海綿質が現れるほどに研磨したものである。先端部は一部欠損するがやや尖るようである。16は鳥骨を縦に割ったものの先端を細く尖らせたもので、先端部の周囲は磨滅している。柔らかいものを対象にした錐の可能性がある。

**その他(17~18)**: 17は脛骨の近位端に近い部分を打ち欠き、割れ面を研磨したもので、用途は不明である。16はサルボウの背面を打ち欠き、大きく穴を開けたものである。穴の周囲に研磨はみられない。貝輪の未製品か、あるいは他の用途があったのかは不明である。

#### (4) 石 器

石器は各層から出土しており、石鏃は発掘後に土を篩った結果発見したものが過半数を占めている。以下器種ごとに述べる。

##### 石 鏃(第17図5~24)

5~22は完形品や一部分のみ欠けているものである。これらは、基部形状の違いから、円基(5)、平基(6~7)、尖基(8~13)、凸基有茎(14~22)に区別される。

##### 尖頭器(第17図1~4)

石鏃より大形の三角形状をした石器である。厚く、基部が丸みをもち、両面に粗い加工が施されている。

##### 石 匙(第17図25~26)

共に縦長の石匙である。25は抉りのみ作り出されていて、刃部は素材剥片の鋭利な部分を利用している。26の背面は全面、腹面は周縁に調整剥離があり、抉りと刃部が作られている。先端部は破損後に再加工されている。

##### 石 錐(第17図27~30)

つまみがあるもの(27~29)とないもの(30)とがあるが、錐部は丁寧に加工され、いずれも断面が菱形をしている。29は破損後に基部を再生している。



第17回 石器(1)



番号	地名・発見	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	番号	地名・発見	石種	長さ×幅×厚さ(cm)	番号
1	C-1 2号	石英	4.1×2.8×1.0	21	C-1 2号	石 細	3.4×0.9×0.2	
2	B-1 3号	石英	3.3×2.0×1.4	25	C-1 3号	石 細	5.1×2.3×1.3	
3	B-1 2号	石英	3.4×2.4×1.2	27	C-3 2号	石 細	2.9×0.5×0.4	
4	C-1 2号	石英	2.8×1.8×0.8	28	B-1 1号	石 細	2.7×0.6×0.3	
5	C-1 2号	石英	2.0×1.2×0.5	29	B-1 1号	石 細	3.0×0.3×0.4	
6	A-1 2号	石 細	2.2×1.3×0.6	30	C-1 1号	石 細	2.1×0.6×0.4	
7	C-1 4号	石 細	2.4×1.3×0.6	31	C-1 2号	石 細	2.3×0.6×0.4	
8	A-2 1号	石 細	3.2×1.7×0.7	32	C-2 1号	石英砂岩	5.6×2.2×1.5	
9	C-1 3号	石 細	1.9×0.9×0.5	33	B-1 1号	不定形石器	1.8×2.2×0.5	
10	C-1 1号	石 細	4.2×1.7×0.5	34	A-1 2号	不定形石器	4.6×3.7×1.1	
11	C-2 2号	石 細	1.8×1.2×0.4	35	C-1 2号	不定形石器	4.1×2.8×0.7	
12	C-1 2号	石 細	2.0×1.2×0.5	36	C-1 2号	不定形石器	4.3×3.0×0.7	
13	C-2 5号	石 細	2.9×1.5×0.6	37	A-2 2号	不定形石器	2.2×4.4×1.6	
14	A-2 5号	石 細	2.8×1.3×0.5	38	D-1 2号	不定形石器	2.0×5.1×1.2	
15	C-1 3号	石 細	3.2×1.4×0.5	39	A-2 1号	不定形石器	3.7×4.0×1.5	
16	直 砥	石 細	4.0×1.9×0.3	40	A-2 2号	不定形石器	3.2×2.7×1.3	
17	A-2 5号	石 細	2.8×1.4×0.6	41	C-2 3号	打制石斧	8.8×5.4×1.2	
18	C-2 2号	石 細	1.7×1.3×0.4	42	C-2 2号	磨制石斧	15.80×4.2×1.9	
19	C-1 1号	石 細	12.20×1.7×0.3	43	D-2 1号	打制石斧	4.3×3.0×0.9	
20	C-1 1号	石 細	2.0×0.9×0.3	44	C-2 3号	磨 石	9.5×6.7×6.6	
21	C-2 2号	石 細	12.70×1.8×0.5	5	C-2 3号	磨石	20.00×6.4×5.0	
22	C-2 2号	石 細	2.3×0.9×0.6	6	C-1 4号	磨石	5.9×4.8×4.8	
23	C-2 3号	石 細	13.00×1.1×0.4	7	B-1 1号	石 細	16.50×5.5×4.4	
24	A-2 3号	石 細	1.40×1.2×0.3					

第16図 石器(1)

### 不定形石器(第 17 図 31~40)

31~36は断面形がレンズ状をしているもので、両面加工(31~33)、両面の周縁加工(34~35)、片面のみ周縁加工(36)とがある。37~40は断面形が逆三角形をしているもので、横長剥片を利用しているもの(37~38)と上辺を折断しているもの(39~40)がある。

### 打製石斧(第 18 図 1)

両面の周縁を加工して橢円形を作り出している。刃部は鋭い。基部と刃部には調整剥離の後

についた敲打痕がみられる。

#### 磨製石斧(第18図2-3)

いずれも基部資料で、断面形は長方形に作られている。3は破損後再加工されている。

#### 磨石・敲石(第18図4-6)

両面に研磨痕がみられる。さらに5-6の側面には敲打痕も認められる。いずれも破損している。

#### 石皿(第18図7)

窪みの直径は5cm、深さは1cmで、小形の石皿である。周縁は一部破損している。

これらの石器は出土層位に従ってそれぞれ土器と同じ年代に属するものと思われる。第2-3層からは石鏃などの剥片石器が多く出土しており、第4-5層では少ない点、磨石や石皿など礫石器は逆に第4-5層に多く、尖頭器が第2-3層からのみ出土している点など今回の調査区では時期により違いがある。

#### ② 自然遺物

畠中貝の発掘地点の貝層はヤマトシジミを中心で、含まれる貝殻以外の自然遺物もきわめて少ないと印象を受けたが、貝層の堆積土をすべて持ち帰り、1mmメッシュの篩で水洗したところ、予想以上の自然遺物がふくまれていた。しかし、採集した土量は多く、自然遺物とくに魚骨は微細なものが多いため、選別・同定・分析があまり進まず、今回はこれまでわかった種名のみを示すに過ぎない。詳細については別の機会に発表するつもりである。

#### (1) 軟体動物門

斧足綱- アカガイ・サルボウ・マガキ・ヤマトシジミ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・コタマガイ・ウバガイ・イソシジミ  
腹足綱- ダンベイキサゴ・ヒメエソボラ

#### (2) 脊椎動物門

魚綱 - サメ類・エイ・サケ類・ウゲイ・フナ・コイ科・ギギ・ウナギ・ダツ・ボラ・スズキ・タイ科・ハゼ・フグ

両生綱- カエル

爬虫綱- ヘビ

鳥綱 - キジ・ツル類・カツブリ・カモ・ハクチョウ・オオハクチョウ・ヒシクイ・小型のワシ・タカ類

哺乳綱- ノウサギ・ムササビ・タヌキ・イヌ・イノシシ・シカ・ゴンドウクジラ・クジラ類・イルカ類・ヒト

以上がこれまでにわかった自然遺物であるが、軟体動物門では河口の砂泥底に生息するヤマ

トシジミが90%以上を占め、貝層を構成する貝類の代表となっている。鹹水産の貝類は全体に少ないが、魚骨もヤマトシジミの貝層に対応するように淡水に棲むコイ科とウナギの椎骨がもっとも多い。とくにフナの骨は小型で体長も10cm前後とみられるものが大部分である。鹹水産の魚骨もみられるが量は少ない。哺乳綱ではシカとイノシシ、とりわけシカが多い。鳥綱はカモ類が目立つ。

なお、自然遺物の同定については、金子浩昌氏（早稲田大学講師）の指導を受けたが、岡村道雄氏（東北歴史資料館）からの教示もあった。

## IV 考 察

### A 出土土器について

本貝から出土した土器については前項のように分類された。ここでは各層、遺構ごとにその特徴と年代的位置づけについて検討する。

#### (1) 第5層出土土器

深鉢・壺・注口・鉢形土器があり、深鉢形土器と壺・注口土器はそれぞれ器形と文様の特徴により分類されたが、明らかに異なる複数の時期の土器が含まれており、他遺跡との比較によって各器形・各類の所属時期をまとめると下記のようになる。

- ① 深鉢 A1 類
- 壺・注口土器 B 類 } 河南町宝ヶ峰遺跡
- } 気仙沼市田柄貝 (手 他: 1986) に類例- 後期中葉宝ヶ峯式
- ② 注口土器 A 類- 丸森町清水遺跡(志間: 1960) に類例- 後期中葉西ノ浜式
- ③ 深鉢 A2 類 }
  - B1 類 松島町西ノ浜貝塚 (斎藤: 1968)
  - B2 類 気仙沼市田柄貝 (手 他: 1986) に類例- 後期後葉金剛寺式

この中で③の土器は西ノ浜貝 や田柄貝 ではさらに2-3時期に細分されるものを含んでいることが知られている。

#### (2) 第4層出土土器

第4層出土土器には深鉢・壺・注口・鉢形土器がある。文様は魚眼状などを成す三叉文が特徴的であり、深鉢形土器では弧線文が多用されており、刻目や縦文が充填される。深鉢 A 類は第5層出土土器(深鉢 A2 類)と胴部文様に共通性があり、同じ系譜にあることが知れる。

これらの土器は昭和30年に発掘された鳴瀬町里浜貝 台囲地点のBトレンド(小井川: 1980) Cトレンド(斎藤良治: 1968)などに類例があり、後期末葉として金剛寺式の中でも新しい段階に位置付けられている。

### (3) 第2・3層出土土器

鉢・皿形土器・注口土器があり、その器形や文様からみて一迫町山王遺跡(伊東・須藤: 1985)などに類例が求められ、晩期中葉・大洞C2式に位置付けられる。しかし、未だ羊齒状文の名残りを留める鉢形土器(第11図9、16、17)や皿(第11図40)などは、より大洞C1式に近い特徴を残している。

### (4) 第1層(表土)・A区出土土器

前述した第5~2層にみられない土器をA~Dとした。文様の特徴からみて、これらは次の土器型式に比定される。

A : 後期「宝ヶ峯式」、B・C : 晩期「大洞B式・大洞B-C式」、D : 中期「大木9式」

## B 食料の獲得

ここでは、まず最初に畠中貝 周辺の現地形を外観することにし、その後で、縄文時代後期~晩期における地形を復元し、食料を採集した場所について考える。

### ① 現在の地形(第19図)

畠中貝 の西には 200m級の山から成る亘理地墨山地が楓木まで南北に走っている。東は貝から 6kmいくと太平洋になる。阿武隈山地に端を発している阿武隈川は、亘理地墨山地の西麓に沿って流れている、これが途切れる楓木で東に大きく流れを変えて太平洋に注いでいる。阿武隈川流域では両岸に自然堤防が発達している。また太平洋岸では海岸線に沿って浜堤が数列みられる。最も内陸にあるのは、名取・岩沼・亘理へと続くもので、畠中貝 の北で終わる。最も新しいのは現海岸線に沿って多賀城から亘理に至るまで連続している。

亘理付近の浜堤は、特に発達が著しく、内陸部と現海岸線にあるものの間に、さらに 2~3 列ほどある。中間と現海岸線に沿った浜堤は山元町では山地と接するため、なくなっている。

### ② 古地形の復元

阿武隈川が東に大きく曲がる、内陸部の柴田町楓木周辺には、早期後半から前期前半に作られた貝 が 6ヶ所知られている(芳賀: 1983)。どの貝 も早期後半ではハマグリ、前期前半ではヤマトシジミを主体としており、主要な貝が時期によって違っている。前期になると楓木周辺では、環境に変化があったようで、これは早期後半の時代には旧楓木湾(斎藤: 1981)として、内湾化していたのが、前期前半では阿武隈川によって形成された自然堤防によって湾口がふさがれ、潟湖化したことを示している。

この自然堤防と、海岸部の沖積地の最も内側にある浜堤は近接していることから、浜堤は前期の海岸に沿っていると考えられる。発達した浜堤上には縄文時代の遺跡が多く、これらの浜堤がいつごろ形成されたのかよくわからないが、いちばん外側の浜堤は現在の海岸線によっ

て形成されたものであるから、縄文時代後期から晩期の海岸線は、畠中貝の東にある中間の浜堤群のいずれかに沿っていたといえよう。

以上のこととふまえて、畠中貝が形成された頃の地形を推定してみると、西は亘理地盤山地、北は阿武隈川右岸の自然堤防、東は浜堤、南は地盤山地と浜堤が近接していた状況が考えられる。つまり、現在の地名でみると、亘理・今泉・荒浜・長瀬・山下・亘理を結ぶ地域に、旧亘理・山元潟とも呼べるような広大な潟湖が形成されていたようである。この潟湖は、湾の入口がふさがれてできたものではなく、陸と海による土砂の堆積作用によって形成された地形である点で、縄文時代前期に成立していた旧槻木潟とは異なる。

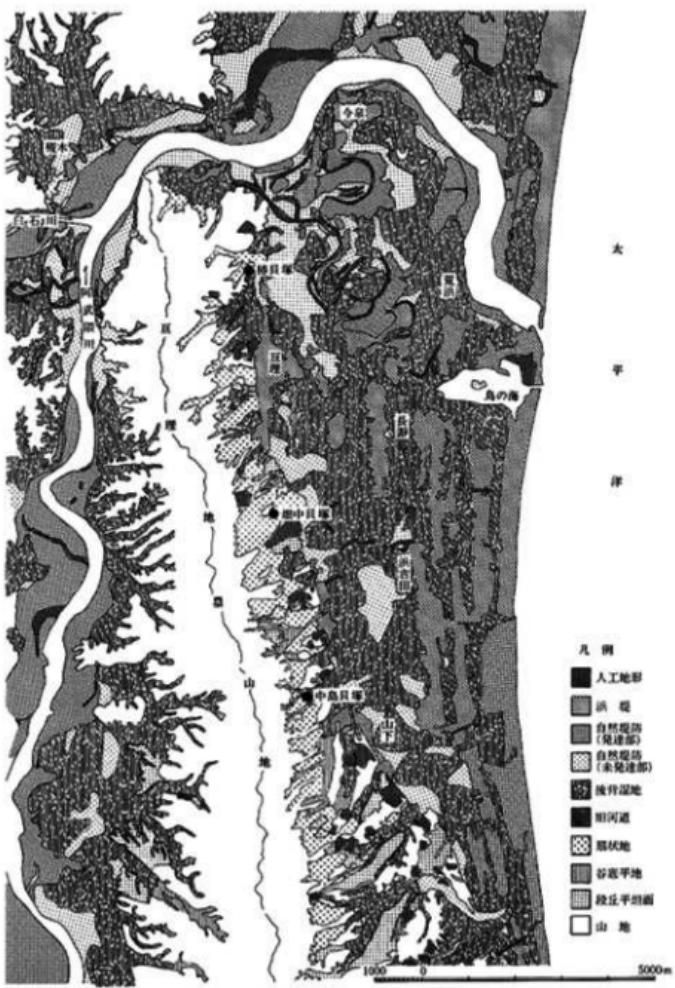
### ③ 生活の場

畠中貝から出土している自然遺物は、前節で復元した環境内でとられている。すなわち、哺乳類は亘理地盤山地、ヤマトシジミは旧亘理・山元潟、コイ科魚類は地盤山地から潟湖に注いでいる河川で捕獲されているよう。また若干出土している、沿岸砂底に生息するチョウセンハマグリ、ダイベイキサゴ、ウバガイ、コタマガイは浜堤の東まで出かける機会があったことを示している。また、貝周辺や山地では堅果類をはじめとする植物質食料も多く取られていよう。

ヤマトシジミは殻高3cm前後の大きさのものが多いが、1mmの篩には殻高1cmに満たないものも目立っている。このことから、1個1個採集したのではなく、カゴのようなもので泥ごとすくって取っていたとも考えられる。

コイ科魚類の咽頭歯では截頭形をしたものが多いことからフナが多く取られていたことがわかる。現生フナ(体長10.0cm)の咽頭骨より小さいものが大部分である。これらは、大きさからみて釣ったのではなく、網ですくったのであろう。

骨角器では話の可能性があるもの(第16図11)や彎曲刺突具の可能性があるもの(第16図7)が出土しているが、数は多くない。近くに所在する椿貝や中島貝でも同じ傾向にある。漁具と推定される骨角器が少ないと、刺突や釣りによる漁法は畠中貝を代表する捕獲法でないことを示している。同じ頃、松島湾周辺では燕舟離頭話や釣針が著しく発達している。この違いは、広大な潟湖を生活の基盤とする生態系(畠中貝・椿貝・中島貝)と魚類が豊富な内湾を生活の場としている生態系(松島湾周辺の貝)の違いを反映しているのだろう。



第19図 道跡周辺の微地形区分図(宮城県:1985より)

## 引用・参考文献

- 我孫子 昭二(1969)：「東北地方における縄文時代後期後半の土器型式- 所謂『コブ付土器』の編年-」『石器時代9』
- 伊東信雄(1957)：『宮城県古代史』『宮城県史1』
- 伊東信雄・須藤隆(1985)：『山王廻遺跡調査図録』一迫町教育委員会
- 井関 広太郎(1983)：『沖積平野』東大出版会
- 内田要・内田清之助・内田享(1965)：『新日本動物図鑑(中) (下)』北隆館
- 金子 浩昌(1984)：『貝の歴史』東京美術
- 吉良 哲明(1954)：『原色日本貝類図鑑』保育社
- 草間俊一・金子浩昌編(1971)：『貝鳥貝 - 第4次調査報告 -』岩手県花巻町教育委員会
- 後藤 勝彦(1956)：『宮城県古島里浜台貝具の研究』『宮城県の地理と歴史1』
- 後藤 勝彦(1960)：『宮城県名取市高館金剛寺貝出土縄文式土器の研究』『宮城県の地理と歴史2』
- 後藤 勝彦(1962)：『陸前宮戸島里浜台貝具 出土の土器について- 陸前地方後期縄文式文化の編年的研究-』『考古学雑誌48-1』
- 小井川 和夫(1980)：『宮戸島台貝具 出土の縄文後期末- 晩期初頭の土器』『宮城史学7』
- 斎藤 良治(1960)：『宮城県鳴瀬町宮戸台貝具 の研究- 昭和30年度Cトレンチ-』『宮城県の地理と歴史2』
- 斎藤 良治(1968)：『陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について- 宮戸台貝具 及び西ノ浜貝 出土の土器を中心として』『宮城県の地理と歴史3』
- 斎藤 良治(1981)：『楢木貝群』『広域整備保存対策調査研究報告4』文化庁
- 志間 泰治(1960)：『丸森町清水遺跡の調査』『宮城県の地理と歴史2』
- 志間 泰治(1975)：『亘理町史 上』
- 田崎 敬修(1971)：『沖積世における海面変化(高度時期)について- 東北南部太平洋岸(岩沼・相馬・原町)-』『福島考古12』
- 手 均他(1986)：『田柄貝 I』『宮城県文化財調査報告書111集』
- 富永 盛治郎(1963)：『五百種魚体解剖図譜(1)』角川書店
- 波部 忠重(1961)：『続原色日本貝類図鑑』保育社
- 林 謙作(1984)：『宮城県下の貝群』『宮城の研究1 考古学篇』清文堂
- 芳賀 寿幸(1983)：『柴田町史 資料篇』
- 藤沼 邦彦(1981)：『東北地方』『縄文土器大成4 晩期』雄山閣
- 横 要照(1968)：『陸前宮戸島に於ける縄文後期末遺物の研究- 台貝出土の土器についての一考察』『宮城県の地理と歴史3』
- 松本 秀明(1984)：『沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸変化』『宮城の研究1考古学篇』清文堂

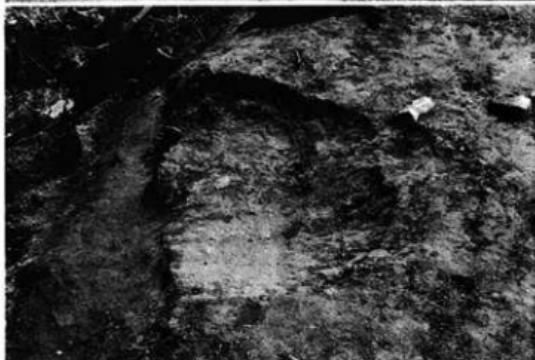
- 宮 城 県 (1985) :『宮城県地震地盤図作製調査報告書』
- 宮城県教育委員会 (1981) :「宮城県遺跡地図・宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書第73集』
- 山 内 清 男 (1964) :「小川貝」『福島県史第6巻』
- 山 崎 京 美 (1981) :「三貴地遺跡における動物遺体の研究」『三貴地遺跡- 三貴地貝 周辺における縄文後晩期遺跡の研究』

写 真 図 版

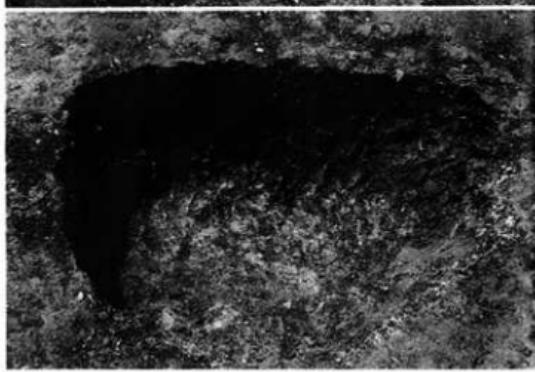
道路近景



第1号土壤



第2号土壤



图版1



B—1区西壁断面



B—2区西壁断面



C—2区西壁断面

图版2

C—2区第5层  
遗物出土状况



D—2区第5层  
遗物出土状况



C—1区第2层  
遗物出土状况



图版 3



B-1区第4層  
遺物出土状況

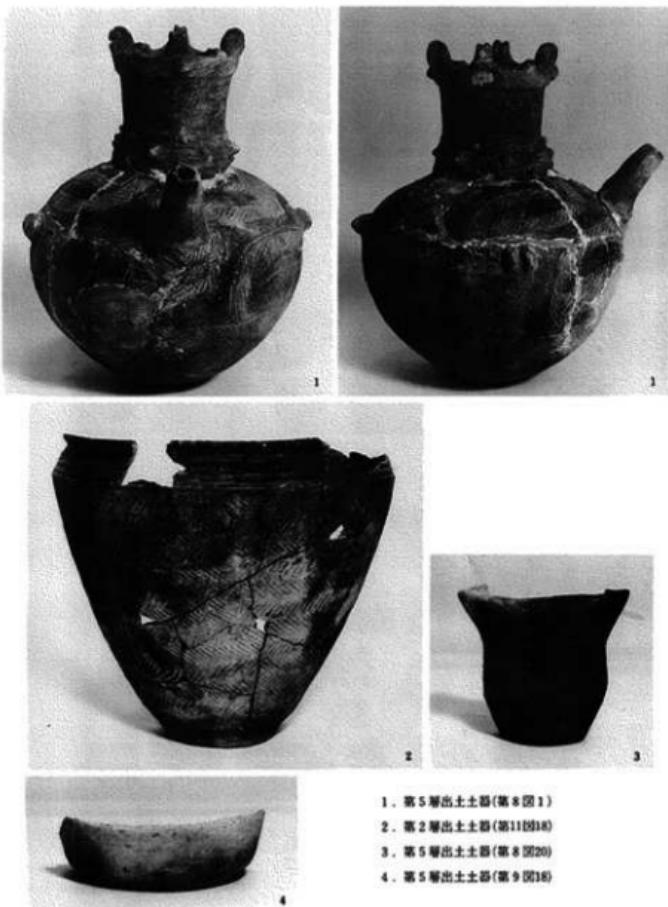


C-1区第3層  
遺物出土状況



D-2区第3層  
遺物出土状況

四版 4

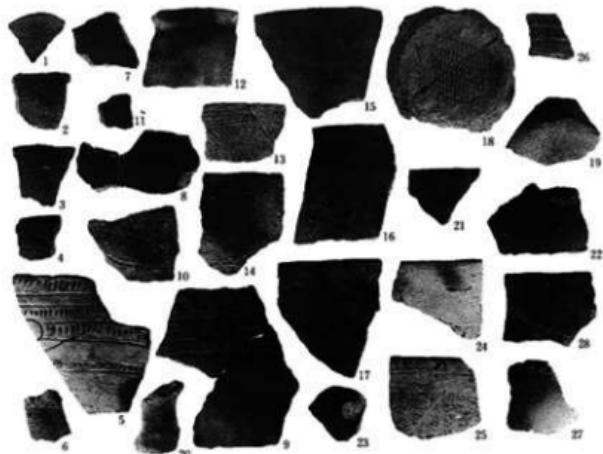


1. 第5層出土土器(第8圖1)

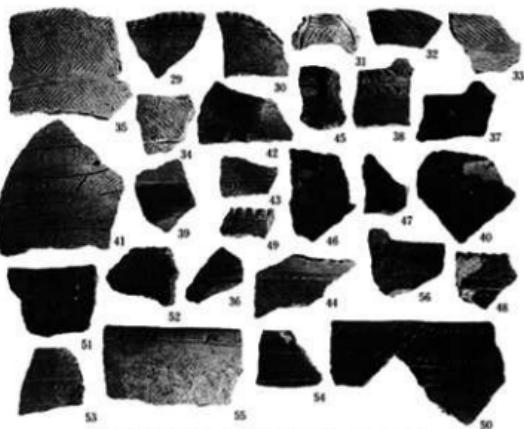
2. 第2層出土土器(第11圖16)

3. 第5層出土土器(第8圖20)

4. 第5層出土土器(第9圖16)

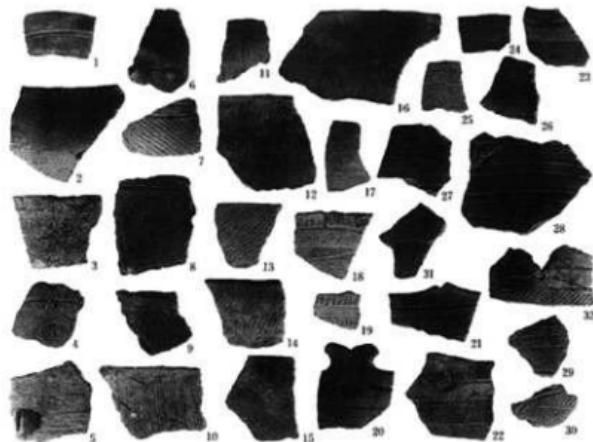


第1・2号土墳出土土器(1~28…第7回1~28)



第5層出土土器(29~56…第8回2~17・19・21~32)

図版6

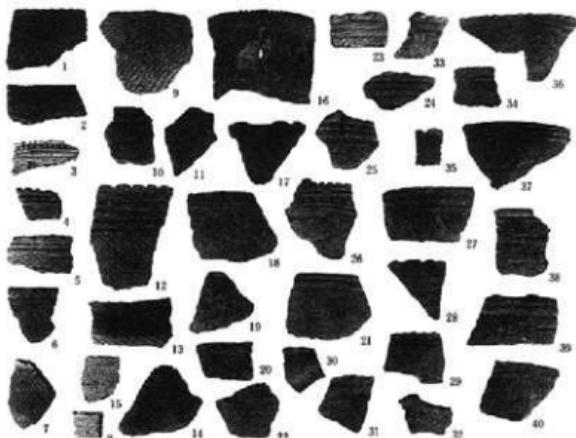


第5・4層出土土器(1~17・18~32--第9図1~17・第10図1~15)

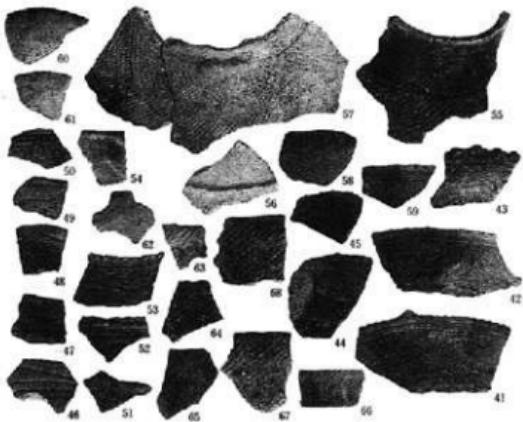


第4層出土土器(33~59--第10図16~42)

図版7



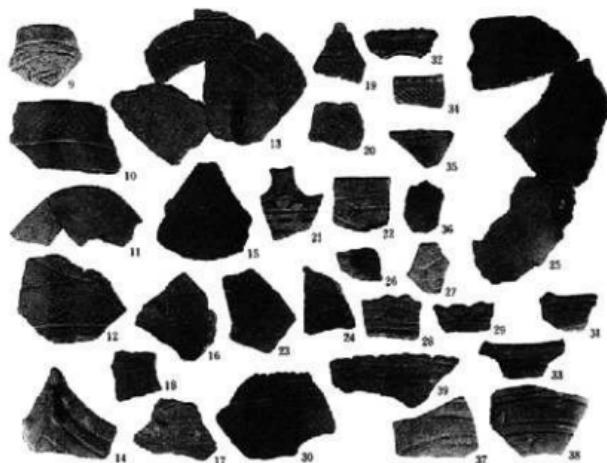
第2・3層出土土器(1~40…第11図 1~17・19~22・24~37・41~45)



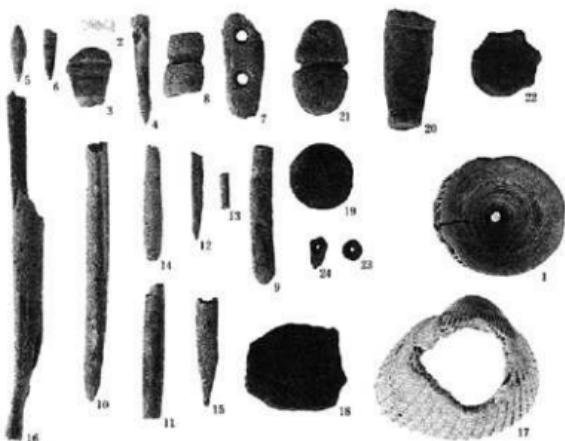
第2・3層出土土器(41~68…第12図 1~15・17~19・24・26~34)



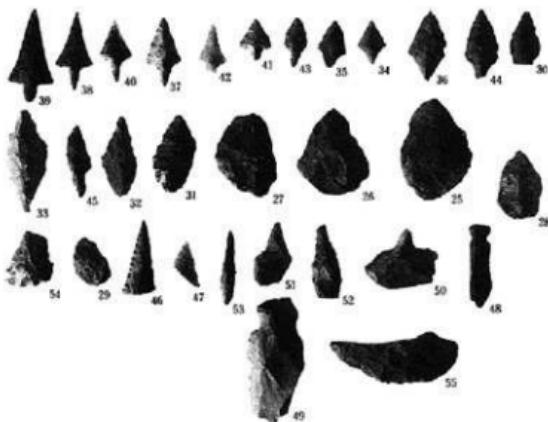
第2・3・1・5層出土土器(1～6・7・8…第11回38～40・第13回21～23・第14回31・第11回23)

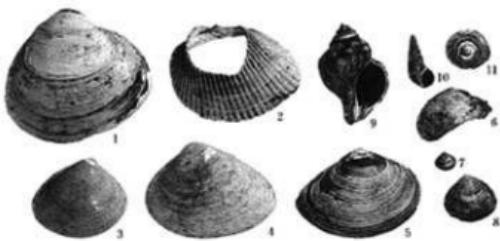


第1層・A区出土土器(9～39…第14回1～30・32)

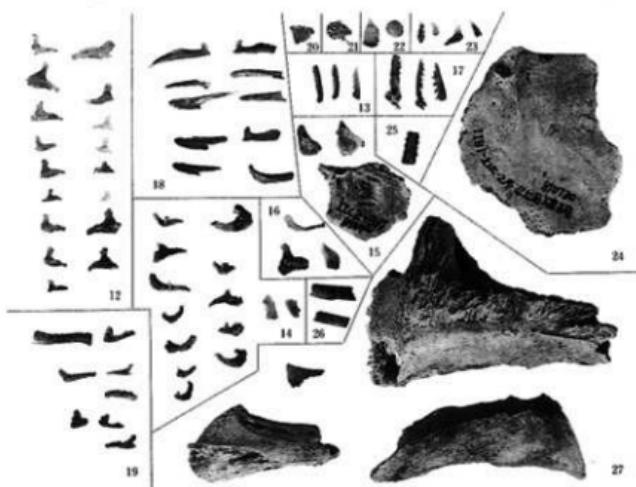


骨角器(1~16…第16圖1~13・15~17)・貝製品(17…第16圖18)・土製品(19~23…第15圖3・5~9)石製品(24…第15圖10)

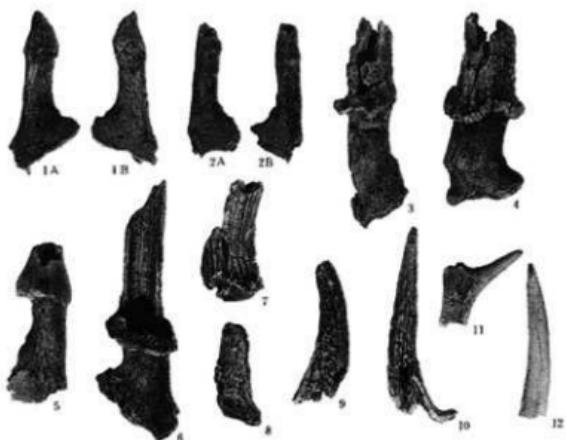




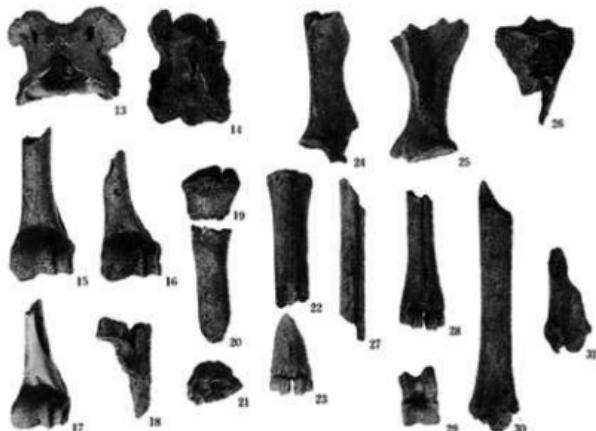
自然遺物  
 1…ウバガイ 2…アカガイ 3…ハマグリ 4…チヨウセンハマグリ 5…コタマガイ  
 6…イソシジ 7・8…ヤマトシジ 9…ヒメエゾボラ 10…ウミニナ  
 11…ダンベイキサゴ



自然遺物  
 12・13…コイ科 14・15…フナ 16…ウダイ 17…ギギ 18…ウナギ 19…ハゼ  
 20…サケ科 21・22…タイ 23…サメ 24…スズキ 25…エイ 26…ダフ 27…フグ



自然遺物 (1~12…皮角)



自然遺物 (13~31…シカ部骨)

図版12



自然遺物 (1・2…シカ 3～15…イノシシ)



自然遺物  
 (16…タヌキ 17…ウサギ 18…ムサビ 19…イヌ 20…テン 21…ヒト 22…輪姫  
 23…ゴンドウクジラ 24…イルカ 25…カエル 26…カモ 27…ハクチョウ  
 28…オオハクチョウ 29…ツル 30…ヒシトイ 31…キジ 32…カイツブリ  
 33…ガン 34…ワシ タカ類)

図版13